

『東亜新報』の編集局・論説委員について
——『東亜新報』研究のためのおぼえがき

On the Editorial Staff of Toa Shinpo

戸塚麻子・神谷昌史

Asako TOTSUKA・Masashi KAMIYA

(平成三十年十一月九日受理)

抄 録

『東亜新報』は一九三九年七月から一九四五年の日本の敗戦まで、中国北京などで発行されていた日本語新聞である。華北駐留軍の要請に基づいて現地の邦字紙を統合して創刊されたいわゆる「国策新聞」である同紙については、関係者の回想などは残されているものの、実態の把握が困難であった。本稿では各種の資料をつきあわせて編集局や論説委員の変遷を明らかにし、今後の研究の基礎的資料とすることを企てた。この作業を通して、編集局の中心的な顔ぶれについて創刊期から四四年までを明らかにできた。また論説委員である高木富五郎と長谷川光太郎の入社時期や、社説欄の執筆者について推定した。さらにもう一人の論説委員との証言もある竹内順三郎についても検討を加えた。併せて日本にはほとんど所蔵がない同紙の創刊から第五四六号までに掲載された「論説」(社説)の題目一覧を付し、基礎的資料として活用できるようにした。

キーワード…『東亜新報』 外地メディア 国策 日本語新聞 占領下北京

はじめに

『東亜新報』は一九三九年七月から一九四五年の日本の敗戦まで、中国北京などいわゆる「北支」において発行されていた日本語新聞である。華北駐留軍の要請に基づいて、当時の対外的な情報宣伝活動を担っていた同盟通信社が中心となり、現地既存新聞が統合されて新たな新聞として創刊されたのが『東亜新報』であった。

「陸軍肝いりの国策新聞」(山本武利)¹⁾として語られることが一般的な同紙は、当時の様々な資料やのちの回想類は種々存在しているが、それらを取りまとめた研究がほとんどなく、その実態の把握が難しいのが現状である。本稿は編集局や論説委員についてその変遷等をまとめ、今後の研究の基礎的資料とすることを企てるものである。²⁾

一 編集局員の変遷

まず基礎的資料である『東亜新報おぼえがき』³⁾における記述に従って、東亜新報社の取締役および編集局の顔ぶれを見ていこう。同書所載の石川輝「序」によると創刊期は次のようになっている。

取締役は、代表取締役社長が徳光衣城、常務取締役が西

池(末彦)業務局長、取締役が大矢信彦(庸報⁴⁾社長)、黒根祥作、安藤万吉。監査役が佐々木健児、葭村外雄。

編集局は、佐々木金之助、高木健夫、石川輝の三人が編集総務。一年後の昭和十五年に佐々木が編集局長、高木が主筆になった。当初、この三人は単なる社員で、二年後に佐々木だけが取締役に、天津支社で新聞を発行した時、大川(幸之助)は電通を退社して東亜へ入社し、取締役副社長、天津支社長になった。⁵⁾

また同書巻末の「東亜新報社・社員名簿」によれば、一九四四年六月の段階では、役員として、徳光伊助(衣城)(社長)、大川幸之助(副社長)、佐々木金之助(常務取締役)、黒根祥作(取締役)、大矢信彦(同)、安藤万吉(同)、佐々木健児(監査役)、葭村外雄(同)とされている。編集局の中心メンバーとして、佐々木金之助(局長)、高木健夫(主筆)、石川輝(総務)、高木富五郎(論説委員)、長谷川光太郎(同)となっている。⁶⁾ 創刊時と比べると、編集局の顔ぶれとして佐々木金之助・高木健夫・石川輝のいわゆる『東亜新報』の三羽ガラス⁷⁾に、論説委員として高木富五郎と長谷川光太郎が加わっていることになる。

では他の資料によって、編集局メンバーの変遷を補ってみよう。まず、『東亜新報』創刊後間もない一九三九年八月に『北支那』に掲載された記事⁸⁾では、「編集局の陣容」として「局

長（兼）徳光衣城」「総務佐々木金之助、同高木健夫、同石川輝」とあり、以下整理部・外交部・經濟部の構成員が列挙されている。この記事が正確であるとするなら、創刊直後は編集局長を社長の徳光が兼務している。前掲の石川輝の回想での「昭和十五年に佐々木が編集局長（中略）になった」と併せると、一九三九年の創刊時は徳光衣城が社長と編集局長を兼務し、翌四〇年に佐々木金之助が編集局長に就任したことになる。『北支那』は天津で発行されていた「北支唯一の綜合雑誌」（表紙に印刷された惹句）であり、『東亜新報』関係者も多く寄稿しているもので、『東亜新報』関連の情報の信頼性は高いと考えられる³⁰。また同年末に刊行された『昭和十五年版 日本新聞鑑』に「（編局）（兼）徳光衣城。（編集局総務）佐々木金之助、高木健夫、石川輝」³¹という同様の記述があることから、創刊直後に徳光衣城が編集局長を兼任していたことは間違いないだろう³²。

一九四三年時点の資料として『日本新聞報』掲載の記事がある³³。「大陸新聞の現勢」と銘打たれた連載記事のひとつに『東亜新報』を扱ったものがあり、そこでは次のように記されている。

首脳陣は社長徳光衣城、編集局長佐々木金之助、主筆高木健夫、編集総務石川輝、業務局長森下定知、天津支社長大川幸之助、編集局長栗原一男、済南支社長小川晴彦、編

集局長竹内順三郎、太原支社長兼編集局長岡本四郎、石門支社長兼編集局長玉井亮之丞、徐州支社長兼編集局長西田一夫の諸氏³⁴。

『東亜新報おぼえがき』の「東亜新報社・社員名簿」（一九四四年六月時点）と比較すると、北京本社・天津支社は変わりなく、済南支社は編集局長であった竹内順三郎が支社長となり、編集局長に安岡哲三が就任している。太原支社長兼編集局長は岡本四郎から矢野干城に交代している。石門支社長玉井亮之丞に変更はないが、「東亜新報社・社員名簿」には編集局長のポストは記載されていない。また徐州支社は支局となり、一九四三年九月新たに開かれた開封支社の支社長には橋本喜代治が就いている。

二 ふたりの論説委員 高木富五郎と長谷川光太郎

創刊時には名前の見られなかった高木富五郎と長谷川光太郎は、いつ『東亜新報』に入社したのだろうか。このことについては、それぞれ本人の回想が遺されている。まず高木富五郎であるが、太平洋戦争が勃発した一九四一年二月に『東亜新報』に加わっている。高木の自叙伝によれば、一九四一年一月二日三日に北京に到着したという³⁵。高木富五郎は創刊から二年半ほど経ってから『東亜新報』に入社している

のである。

かくて私は論説委員として毎日「隨筆」を書き、三日目に論説を一本書く任務を持ったが徳光社長の旧友として屢々二人で地方巡視の役目を当てがわれて北京生活が始まった訳である。「東亜新報」は北京と天津で発行されていたが私が行ってから済南、徐州、開封、太原に各々支社の新設工作を進め、また石門支社を拡張したり、青島、新郷に支局を新設したが其の都度其の地方の邦字紙を買収合併する工作に何かと努力したものである。かくして「東亜新報」は北京本社をはじめ天津、済南、徐州、開封、石門、太原の各支社の合計七か所と同じ「東亜新報」をそれぞれ印刷発行していたので、徳光社長に随伴して各支社を巡視する私の役目も相当多忙を極めたことである。[※]

もう一人の長谷川光太郎はどうだろうか。長谷川の回想を見ると、その入社はかなり遅く、一九四四年一月のことであり、東京を一九四四年一月二日に出発し、八日に北京に着いている。[※]長谷川は後年インタビューのなかで次のように語っている。

——「東亜新報」ではどういうお仕事をなさっていらしたのですか。

初めは論説委員という名前でしたが、当時は、高木健夫と「中外商業新報」からきた高木富五郎の二人が書いていました。私は名前だけでしたので何か仕事がなくはないと思っていたら北京に国策研究会の支部があったんですよ。

——矢次一夫さんのですか。

そうです。そこへ行っちゃね、いろいろ北京の情報を仕入れて「東亜新報」に囲み物にして入れていたんですよ。

そのうちにね、「華北報道協会」というのができた。新聞の用紙や資材などをあっせんする機関です。別に、「宣伝連盟」というのもありましたが、この「報道協会」の方に、「東亜新報」から出向していったのです。[※]

長谷川は回想録でも「東亜新報におけるわたしの仕事は、論説委員は名ばかりで、調査部の貼り込みの面倒をみながら、傍ら、わたしの方から進んで經濟部諸君のお手助けをした」[※]、「わたしの職名の論説委員は肩書だけで、よほど重要な経済問題がないかぎり、高木健夫氏が殆んど論文を引き受けており、同姓高木富五郎君がそれを補充していた」[※]と書いており、自伝でもインタビューでも論説委員としての仕事はほとんどなかったと述べている。

高木富五郎と長谷川光太郎の自叙伝はそれぞれ詳細なものであり、『東亜新報』の時期に限らず日付なども明確に記さ

れている。おそらく当時の日記やメモなどの記録に依拠して執筆されていると推測され、一定の信頼性があると思われる。それらの回想をつきあわせると、長谷川は論説委員として論説類を書くことはほぼなく、高木富五郎は「毎日「随筆」を書き、三日目に論説を一本書」き、高木健夫が「殆んど論文を引き受けて」いたということになる。『東亜新報』の社説欄は「論説」と名付けられており、他紙同様署名記事ではないために執筆者の特定は非常に困難であるが、多くを主筆の高木健夫が執筆し、高木富五郎が三日に一本かそれ以下程度に「補充していた」という実態が想像される。

三 もうひとりの論説委員？ 竹内順三郎

高木健夫によれば「徳光氏は、かつての同僚後輩を論説委員として招聘した。その中に高木富五郎氏や長谷川光太郎氏それからやはり「国民新聞」で当時学芸部長だった大先輩の竹内順三郎氏などがいた」と述べており[※]、済南支社の編集局長であり、のち支社長になる竹内も論説委員であったとされている。論説委員の肩書を持っていた記者が『東亜新報』に何名いたのかははっきりとせず、管見のかぎり当時の資料には見当たらない。

高木富五郎と長谷川光太郎が論説委員であったことは確かだと考えられるが、竹内順三郎についてはこの高木健夫の証

言以外確認が取れていない。高木健夫の回想を信用するならば竹内も論説委員の肩書を持っており、さらには高木富五郎・長谷川光太郎・竹内順三郎の他にも論説委員がいた可能性もあると読むことができる。

反対にいえば、高木富五郎と長谷川光太郎以外の論説委員がいたという推測の根拠となる文献は高木健夫の回想以外にはまだ見つかっていない。石川輝「東亜新報の幹部たち」は座間勝平・長谷川光太郎・竹内順三郎について簡単に触れたエッセイであるが、「長谷川さんは北京本社の論説委員として入社された」としているのに対し、竹内については済南支社長として迎えられたとしているのみである。ただし、『東亜新報』が刊行されていた時期から四〇年近く後における回想ということもあって、石川の記憶は曖昧で、長谷川光太郎の入社について「それがいつだったのかは不明である」としていたり、長谷川の回想録である『鉛筆がついで50年』が「昭和三年に国民新聞社に移ったまでが掲載されていて、その後のことは書かれていない」——同書の前篇のみを石川は見えており、後篇を確認していないと思われる——とするなど、信頼性に欠けるところがあることも考慮しなければならぬ[※]。また竹内の生涯について比較的詳細に記している加藤須賀雄の文章にも、竹内が「山東省の済南にあった『東亜新報』の社長として迎えられた」ことは書かれているが、論説委員の文字は見えない[※]。竹内が論説委員であったかどうかは

今のところ断定はできないが、いずれにせよ新聞人として長いキャリアを持っていた「東亜新報の幹部たち」のひとりであった。『東亜新報』同様「国策新聞」とされる『蒙疆新聞』の編集長として一九三九年から四四年まで活躍し、同紙を辞任して帰国する途中、徳光衣城に「ひと目ぼれ」されて『東亜新報』に迎えられた竹内は、『東亜新報』について研究する上で欠かすことのできない人物である。

おわりに

本稿ではいくつかの資料をつなぎあわせるかたちで、『東亜新報』の編集局を構成するメンバーの移り変わりや、論説委員についてはほとんど紹介することができなかった。また『東亜新報』創刊号から第五四六号までに掲載された「論説」（社説）の題目一覧を付したが、これら論説の内容についても触れることができなかった。これらについては次の機会に紹介・検討したい。

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C）「日本占領下華北における日本語文学の様相に関する基礎的・発展的研究」（研究課題番号18K00335））の成果の一部である。

一 創刊の経緯等については、東亜会編『東亜新報おぼえがき―戦中・華北の新聞記者の記録』（東亜会、一九八四年）や神谷昌史『東亜新報』研究のためのおぼえがき―創刊期を中心に』（『滋賀文教短期大学紀要』第一八号、二〇一六年三月）を参照のこと。

二 山本武利『朝日新聞の中国侵略』（文藝春秋、二〇一一年）二〇〇頁。

三 筆者のこれまでの『東亜新報』研究としては、前掲『東亜新報』研究のためのおぼえがき―創刊期を中心に』の他、戸塚麻子「日本占領下北京の友情と青春―長野賢（野中修・朝倉康）の『燕京文学』掲載小説をめぐって」（『滋賀文教短期大学紀要』第一八号、二〇一六年三月）、戸塚麻子・神谷昌史「高木健夫『北京百景』―『東亜新報』掲載時における題目一覧」（『滋賀文教短期大学紀要』第一九号、二〇一七年三月）、戸塚麻子「坂井徳三『北京の子供』と児童文学―日本占領下北京の日本語文学」（常葉大学『教育実践報告誌』第一巻第一号、二〇一七年一〇月）、戸塚麻子「創刊期『東亜新報』（一九三九）の文芸・文化記事について―日本占領下北京の日本語新聞」（『常葉大学教育学部紀要』第三八号、二〇一七年一月）などがある。

四 『庸報』は天津で発行されていた中国語新聞。一九二六

- 年にも中国人ジャーナリストの董顕光によって創刊されたが、一九三五年に土肥原賢二により密かに買収され、三七年に同盟通信社により接収された。三九年「大矢信彦は天津総領事館の許可を得て、『庸報』を軍部後援の国策新聞に仕立てた天津でもっとも大きな新聞、北京の『新民報』と共に華北の二大新聞になった」(孫曉萌『庸報』の創刊背景と刊行初期の編集方針―1930年代中国商業新聞の考察を兼ねて)『龍谷大学社会学部紀要』第四二号、二〇一三年三月、一一〇頁。『庸報』については前掲論文の他、孫曉萌の一連の研究を参照(天津『庸報』(1926-1944)の変遷と編集方針についての考察)『龍谷大学社会学部紀要』第三七号、二〇一〇年十一月。「関東軍の宣伝工作についての考察―天津『庸報』の買収と世論操作」『現代中国研究』第三〇号、二〇一二年三月)。
- 前掲『東亜新報おぼえがき』四頁。
- 前掲『東亜新報おぼえがき』一九六頁。
- 前掲『東亜新報おぼえがき』に頻出する。
- 長岡忠一「北京に産れた統制紙 東亜新報―創刊の経緯と機構」(『北支那』第六卷第八号、一九三九年八月)。
- 同誌は北支那経済通信社の発行。
- 『北支那』については戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会編『戦前期中国関係雑誌細目集覧』(三人社、二〇一八年)所収の戸塚麻子『北支那』改題』を参照。
- 『昭和十五年版 日本新聞年鑑』(新聞研究所、一九三九年)一五四頁。
- 同年鑑の昭和十六年版では、「(社長) 徳光衣城。(中略)(編局) 佐々木金之助。(主筆) 高木健夫。(編集総務) 石川輝」となっている。『昭和十六年版 日本新聞年鑑』(新聞研究所、一九四〇年)一四四頁。
- 『大陸新聞の現勢』 東亜新報『日本新聞報』第一八号、一九四三年八月五日。復刻版として井川充雄編『戦時戦後の新聞メディア界―『日本新聞報』附・『満洲新聞協會報』』第二卷(金沢文圃閣、二〇一五年)に所収。
- 『昭和十八年新聞総覧』(日本電報通信社、一九四三年)の『東亜新報』についての記述でもほぼ同様で、天津支社の編集局長が矢野干城とされている点と、岡本四郎が太原支社長のみで編集局長を兼ねているとされていない点だけに違いが見られる。同書一九二頁。
- 冷夢庵『我が生涯』(高木富五郎、一九六三年)四四頁。
- 前掲書、四五頁。
- 長谷川光太郎『鉛筆かたいで50年 わが新聞記者行脚』後篇(新聞行脚五十年刊行会、一九六八年)二〇二―二〇五頁。
- 内川芳美・西田長寿・春原昭彦による聴きとりの記録である長谷川光太郎「飄々と『新聞記者行脚』」(『別冊新聞研究 聴きとりでつづる新聞史』第五号、一九七七年

一〇月) 五七頁。

xviii: 前掲書、二〇六頁。

xix: 前掲書、二一〇頁。

xx: 高木健夫「いつもここにこ長谷川さん」(『別冊新聞研究 聴きとりでつづる新聞史』第五号、一九七七年一〇月) 五頁。

xxi: 石川輝「東亜新報の幹部たち」(前掲『東亜新報おぼえがき』所収) 一六二―一六五頁。

xxii: 加藤須賀雄「解説」(竹内始萬『行雲流水記〈紀行編〉』つり人社・つり人ノベルズ、一九九二年)、一三四頁。

『東亜新報』「論説」題目一覧

凡例

一、以下は『東亜新報』創刊号から第 546 号までに掲載された「論説」の題目一覧である。

一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字体に改めた。

一、サブタイトルの前後に記号がある場合は「一」に統一した。また、記号は前のみにあるものと前後のものがあったが、統一はせず、そのままとした。

一、ルビは（ ）に入れてその語句の後ろに記した。

号数	年/月/日	曜日	朝夕	面	掲載記事名
3	1939/7/3	月	朝	1	イギリス勢力駆逐策を総動員すべし
4	1939/7/4	火	朝	1	援蔣ルートの切断は外蒙赤軍の掃滅にあり
5	1939/7/5	水	朝	1	イギリスの植民地独善を粉砕すべし
6	1939/7/6	木	朝	1	東亜を蝕ばむ最大の罪惡
7	1939/7/7	金	朝	1	尊きこの日を生かせ！
8	1939/7/8	土	朝	1	イギリスを被告とせよ
9	1939/7/9	日	朝	1	事変第三年の性格を決定するもの
10	1939/7/10	月	朝	1	第二の林則徐出でよ
11	1939/7/11	火	朝	1	日本無くんば東亜無し
12	1939/7/12	水	朝	1	新秩序の星座に光輝あらしめよ
13	1939/7/13	木	朝	1	日本人教師の進出を待望す
14	1939/7/14	金	朝	1	東京会談に望む
15	1939/7/15	土	朝	1	第一線將兵の心を心とせよ
16	1939/7/16	日	朝	1	我等何を討伐すべきか
17	1939/7/17	月	朝	1	老北京人に与ふ
18	1939/7/18	火	朝	1	反英の本質は何か
19	1939/7/19	水	朝	1	遂に東京怪談に了るか
20	1939/7/20	木	朝	1	恥かしき日本人
21	1939/7/21	金	朝	1	この血、白河を染めよ
22	1939/7/22	土	朝	1	日本商人諸君
23	1939/7/23	日	朝	1	口約の肚裏を洞察せよ
24	1939/7/24	月	朝	1	汗と、学生と、大陸と
25	1939/7/25	火	朝	1	抗議の山を撤回せよ
26	1939/7/26	水	朝	1	大陸を育くむ青春
27	1939/7/27	木	朝	1	ビフテキと日の丸弁当
28	1939/7/28	金	朝	1	欧洲危機の十字路
29	1939/7/29	土	朝	1	米国は何を得るや
30	1939/7/30	日	朝	1	反英運動の前進
31	1939/7/31	月	朝	1	防共枢軸の新世紀

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

33	1939/8/2	水	朝	1	大陸建設の新段階
34	1939/8/3	木	朝	1	酔はせる者は誰だ
35	1939/8/4	金	朝	1	遅ましき後継者を
36	1939/8/5	土	朝	1	欧・亜の国際的比重
37	1939/8/6	日	朝	1	日華クラブ結成を望む
38	1939/8/7	月	朝	1	反英戦線の統一
39	1939/8/8	火	朝	1	アトラスの告白
40	1939/8/9	水	朝	1	一片歌々の俠気
41	1939/8/10	木	朝	1	爽風、颯然と到る
42	1939/8/11	金	朝	1	鳴動するダンチヒ
43	1939/8/12	土	朝	1	辺疆を監視せよ
44	1939/8/13	日	朝	1	北京マダム論
45	1939/8/14	月	朝	1	たゞ一撃を俟つ
46	1939/8/15	火	朝	1	加賀新総裁閣下
47	1939/8/16	水	朝	1	八月攻勢廻れ右
48	1939/8/17	木	朝	1	つはものを迎へよ
49	1939/8/18	金	朝	1	『水』にひらく歴史
50	1939/8/19	土	朝	1	秋天高し新秩序
51	1939/8/20	日	朝	1	会談より爆弾へ
52	1939/8/21	月	朝	1	歌はんかな、我等
53	1939/8/22	火	朝	1	大自然と闘ふの秋
54	1939/8/23	水	朝	1	陳銘枢と新政権
55	1939/8/24	木	朝	1	独ソは休戦したか
56	1939/8/25	金	朝	1	日本に呼びかける
57	1939/8/26	土	朝	1	民衆の手に返せ
58	1939/8/27	日	朝	1	奸商撲滅に協力せよ
59	1939/8/28	月	朝	1	事変処理への発足
60	1939/8/29	火	朝	1	阿部内閣への構想
61	1939/8/30	水	朝	1	興亜生活の明朗化
62	1939/8/31	木	朝	1	成吉思汗の旗風に・・・
63	1939/9/1	金	朝	1	興亜奉公日に感ず
64	1939/9/2	土	朝	1	驀進せよ・戦時外交
65	1939/9/3	日	朝	1	西に戦乱・東に建設
66	1939/9/4	月	朝	1	欧州破局の責任者
67	1939/9/5	火	朝	1	抗戦の基礎、寂滅す
68	1939/9/6	水	朝	1	天津は起ち上る
69	1939/9/7	木	朝	1	協議よりも実行を
70	1939/9/8	金	朝	1	家を、われ等に！
71	1939/9/9	土	朝	1	神風とはなんぞや
72	1939/9/10	日	朝	1	東亜中立の意義

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

73	1939/9/11	月	朝	1	思想戦を展開せよ
74	1939/9/12	火	朝	1	媚態を厳戒すべし
75	1939/9/13	水	朝	1	スパイを防げ
76	1939/9/14	木	朝	1	事変処理の新展開
77	1939/9/15	金	朝	1	新民会は脱皮する
78	1939/9/16	土	朝	1	第三国駐屯軍の撤退
79	1939/9/17	日	朝	1	硝煙霽るゝ満蒙国境
80	1939/9/18	月	朝	1	吠えろ！ `反英`
81	1939/9/19	火	朝	1	砲煙歐洲への断想
82	1939/9/20	水	朝	1	中央政府の骨格
83	1939/9/21	木	朝	1	殴る日本人を殴る
84	1939/9/22	金	朝	1	袋小路の重慶政情
85	1939/9/23	土	朝	1	戦雲歐洲の天気図
86	1939/9/24	日	朝	1	東亜の角度を求む
87	1939/9/25	月	朝	1	波蘭料理の味や奈何
88	1939/9/26	火	朝	1	のたうつ蒋介石
89	1939/9/27	水	朝	1	中央政権に望む
90	1939/9/28	木	朝	1	洞庭湖畔の大作戦
91	1939/9/29	金	朝	1	ビラと電波と弾丸と
92	1939/9/30	土	朝	1	戦死者の墓を守れ
93	1939/10/1	日	朝	1	バルト海、浪赤し
94	1939/10/2	月	朝	1	北支開発の新方向
95	1939/10/3	火	朝	1	西尾総司令官の決意
96	1939/10/4	水	朝	1	インドは起つか
97	1939/10/5	木	朝	1	新民会かくて勁(つよ)し
98	1939/10/6	金	朝	1	天津・水に勝てり
99	1939/10/7	土	朝	1	貿易省を祝福する
100	1939/10/8	日	朝	1	歐洲平和影薄し—ヒトラー演説の反響—
101	1939/10/9	月	朝	1	南海に描く新作戦—中山県城わが手に帰す—
102	1939/10/10	火	朝	1	幸福を守る甲冑—保甲制度を論ず—
103	1939/10/11	水	朝	1	日に朗に日に強し—新民会の再出発—
104	1939/10/12	木	朝	1	大臣(おとゞ)は飛ぶべし—第一線を視察せよ—
105	1939/10/13	金	朝	2	罷業小役人黙れ!—外務省騒動を叱る—
106	1939/10/14	土	朝	1	複雑怪奇の放火犯—ソ聯外交の二面性—
107	1939/10/15	日	朝	1	外交官への判決—吏道何処へ行く?—
109	1939/10/17	火	朝	1	大陸日本人の印象—生活の新秩序を提唱す
110	1939/10/19	木	朝	1	尻尾を持つ媚態—英の対日接近説を暴く
111	1939/10/20	金	朝	1	大陸におろがむ—靖国神社臨時大祭—
112	1939/10/21	土	朝	1	苦悶する抗戦主流—中国共産党はどこへ?
113	1939/10/22	日	朝	1	平和と秩序への愛—グラー米大使に寄す—

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

114	1939/10/23	月	朝	1	鉄石外交の舵手—野村外相の車中談—
115	1939/10/24	火	朝	1	援蔣の楯の両面—どこまで続く老獪外交
116	1939/10/25	水	朝	1	居直つた毛沢東—重慶のクー・デタ気構へ
117	1939/10/26	木	朝	1	居留民に訴へる—兵隊クラブを作れ
118	1939/10/27	金	朝	1	或る東洋認識論—一米人は斯く考へる
119	1939/10/28	土	朝	1	国風、大陸に響かん—興亜の歌は生れたり
120	1939/10/29	日	朝	1	重慶は恐怖する—中央政権の民心把握
121	1939/10/30	月	朝	1	国民党は崩潰せり—赤の奴隷となり下る
122	1939/10/31	火	朝	1	その血を節約せよ—北京の非興亜の風景
123	1939/11/1	水	朝	1	二つの東京会議 野村=グルー・谷=クレギー
124	1939/11/2	木	朝	1	日本語を用ひよ—言葉は文化の尖兵である
125	1939/11/3	金	朝	1	御盛徳、東亜に遍し—大陸に排す、明治節
126	1939/11/4	土	朝	1	日ソ国交の調整—何がそれを求めるか
127	1939/11/5	日	朝	1	共産地区の炊煙—赤色ルートの現状—
128	1939/11/6	月	朝	1	第二世の大陸教育—こゝにも新秩序の要請
129	1939/11/7	火	朝	1	羽搏け、東亜の翼—中華航空の新態勢
130	1939/11/8	水	朝	1	新政権誕生に序す—中国憲政の朝ぼらけ
131	1939/11/9	木	朝	1	印度民衆に与ふ—独立運動の新展開
132	1939/11/10	金	朝	1	苦力をどうする？ —その交流の調整と統制
133	1939/11/11	土	朝	1	新生中国の意義—毅然と辺疆を睥睨せよ
134	1939/11/12	日	朝	1	イタリアの示唆—その対ソ、対英仏態度
135	1939/11/13	月	朝	1	使臣大いに働く—東亜新事態を直視せよ
136	1939/11/14	火	朝	1	政治意識の要求—新秩序に装甲せしめよ
137	1939/11/15	水	朝	1	実学の気風を求む—北支の教育方針
138	1939/11/16	木	朝	1	チタ会議の性格—国境測定委員会開く
139	1939/11/17	金	朝	1	南海に揚がる凱歌—北海奇襲上陸と建国軍
140	1939/11/18	土	朝	2	周章てる抗日将領—敗戦苦の西南支那
141	1939/11/19	日	朝	1	東亜の益蟲たれ—旗組は害蟲である
142	1939/11/20	月	朝	1	聖戦、光新たなり—大本営設置二周年
143	1939/11/21	火	朝	1	泥沼に闘ぐもの—われらは進む建設へ
144	1939/11/22	水	朝	1	民心把握の要諦—片手落ちとなる勿れ
145	1939/11/23	木	朝	1	防共の楯をとれ—思想戦は北支の宿命だ
146	1939/11/24	金	朝	1	幸福なる戦時色—独逸の場合を想へ
147	1939/11/25	土	朝	1	中央政権への視角—岐路に彷徨する外交
148	1939/11/26	日	朝	1	国体を認識させよ—日本を知らぬ中国青年
149	1939/11/27	月	朝	1	我慢出来ぬ迷惑 英の貨物拿捕声明
150	1939/11/28	火	朝	1	交通新秩序論—第一歩より始めよ
151	1939/11/29	水	朝	1	北欧襲ふ戦雲—緊張するソ芬の空気
152	1939/11/30	木	朝	1	民衆層への浸透—仏教同願会の施設
153	1939/12/1	金	朝	1	汪は神様でない—中華日報に訓へる

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

154	1939/12/2	土	朝	1	クリスマス外交—東亜は七面鳥に非ず
155	1939/12/3	日	朝	1	擬似独身について—東亜建設の一弱線
156	1939/12/4	月	朝	1	曇らせること勿れ—明德親民の羅針盤
157	1939/12/5	火	朝	2	聖地・一文字山へ—感激の花束編まん
158	1939/12/6	水	朝	1	將軍呉佩孚の死—信念に殉じた一つの型
159	1939/12/7	木	朝	1	悩みは涯なし—冬季攻勢の楽屋裏
160	1939/12/8	金	朝	1	輿論は突変するか—アメリカの対日態度
161	1939/12/9	土	朝	1	次はバルカンだ—神経戦争は延焼する
162	1939/12/10	日	朝	1	友愛の火を燃せ—中国民衆への義金
163	1939/12/11	月	朝	1	回教徒への触手—西北支那を忘れるな
164	1939/12/12	火	朝	1	手袋をぬぎ給へ—日華提携の現実面
165	1939/12/13	水	朝	1	南京陥落に思ふ—歴史の意志に歩まう
166	1939/12/14	木	朝	1	民衆層への浸透—臨時政府二周年記念日を迎ふ
167	1939/12/15	金	朝	1	武器は人なり—晋北思想戦の實際を視る
168	1939/12/16	土	朝	1	急がずまはれ—陣痛期にある中央政權
169	1939/12/17	日	朝	1	全欧赤化の危機—戦ひの後に来るもの
170	1939/12/18	月	朝	1	怪奇なる日本語—純粹と正統を取戻せ
171	1939/12/19	火	朝	1	モンテ港の悲劇—袖珍戦艦の自爆に想ふ
172	1939/12/20	水	朝	1	長江開放論—第三国よ心して通れ
173	1939/12/21	木	朝	1	政界旧秩序風景—阿部内閣と議会潮流
174	1939/12/22	金	朝	1	胡同の帝国主義—民衆義金を拒む群
175	1939/12/23	土	朝	1	東亜の規模を！—第七十五議會に求む
176	1939/12/24	日	朝	1	日米鬼の首輪—野村・グルー第四次会談
177	1939/12/25	月	朝	1	鎮南関の占領—援蔣路塞源の効果
178	1939/12/26	火	朝	1	民団会議に望む—横断的な建設同盟結べ
179	1939/12/27	水	朝	1	冬季攻勢の効果—抗戦目標の喪失のみ
180	1939/12/28	木	朝	1	虚礼廃止論—焦点を興亜的に
181	1939/12/29	金	朝	1	国境か、国交か—チタ会議の收穫
182	1939/12/30	土	朝	1	啾啾たり皋蘭城—猛鷲襲ふ大戦果
183	1939/12/31	日	朝	1	未来的な回想—昭和十四年を送る
184	1940/1/1	月	朝	1	東亜の黎明に序す
185	1940/1/2	火	朝	1	明るい外交関係
186	1940/1/4	木	朝	1	年頭の辞を生かさう
187	1940/1/5	金	朝	1	新しき政治力—政党は復活するか
188	1940/1/6	土	朝	1	文化工作相對論
189	1940/1/7	日	朝	1	宣撫官廿万人
190	1940/1/8	月	朝	1	新政權驀進す
191	1940/1/9	火	朝	1	反日アメリカ論
192	1940/1/10	水	朝	1	中央政權の生理
193	1940/1/11	木	朝	1	多田声明を憶ふ

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

194	1940/1/12	金	朝	1	事変と政局一新
195	1940/1/13	土	朝	1	バルカン協同体
196	1940/1/14	日	朝	1	強力日本の構図 永続性ある政治体制
197	1940/1/15	月	朝	1	国策強化への継走 阿部内閣の退陣
198	1940/1/16	火	朝	1	“海賊”睨み合ふ—英ソ衝突の危機
199	1940/1/17	水	朝	1	米内新首相閣下
200	1940/1/18	木	朝	1	食糧問題の明朗化
201	1940/1/19	金	朝	1	国共関係の現段階
202	1940/1/20	土	朝	1	英国何を狙ふか
203	1940/1/21	日	朝	1	有田外交の再出発
204	1940/1/22	月	朝	1	中央政権の特殊性
205	1940/1/23	火	朝	1	第三国人の態度 租界検問所の断想
206	1940/1/24	水	朝	1	無礼なり英軍艦
207	1940/1/25	木	朝	1	新中国とイタリア
208	1940/1/26	金	朝	1	日米無条約時代
209	1940/1/27	土	朝	1	新政府への意識
210	1940/1/28	日	朝	1	代用食、前へオイ
211	1940/1/29	月	朝	1	民心把握の裏表
212	1940/1/30	火	朝	1	英独の決戦期
213	1940/1/31	水	朝	1	輸出日本語論
214	1940/2/1	木	朝	1	再開議会に望む
215	1940/2/2	金	朝	1	オルドスの砲煙
216	1940/2/3	土	朝	1	対ソ外交の限界
217	1940/2/4	日	朝	1	落第代議士に寄す
218	1940/2/5	月	朝	1	帰還将兵の言葉
219	1940/2/6	火	朝	1	食糧に不安なし
220	1940/2/7	水	朝	1	文字を懼れよ
221	1940/2/8	木	朝	1	割切れぬ“浅間丸”
222	1940/2/9	金	朝	1	苦悶する回教軍
223	1940/2/10	土	朝	1	九国条約廃棄論
225	1940/2/12	月	朝	2	欧洲戦局の新展開
226	1940/2/13	火	朝	1	大詔 拝す新大陸
227	1940/2/14	水	朝	1	アルカウ、歩かう
228	1940/2/15	木	朝	1	大陸の主婦に告ぐ
229	1940/2/16	金	朝	1	『東方学』への発足
230	1940/2/17	土	朝	1	帝国議会の明暗
231	1940/2/18	日	朝	1	新秩序我に在り
232	1940/2/19	月	朝	1	北支開発の移駐
233	1940/2/20	火	朝	1	明朗山東の点晴
234	1940/2/21	水	朝	1	首相の大陸視察

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

235	1940/2/22	木	朝	1	外交に道義ありや
236	1940/2/23	金	朝	1	大陸・桜・人間・・・
237	1940/2/24	土	朝	1	新民会と宣撫班
238	1940/2/25	日	朝	1	新中国の思想戦
239	1940/2/26	月	朝	1	欧州局面暗転か
240	1940/2/27	火	朝	1	“中国話”を生かせ
242	1940/2/29	木	朝	1	大陸型・非大陸型
243	1940/3/1	金	朝	1	武器なき大兵团
244	1940/3/2	土	朝	1	綜合雑誌の泣言
245	1940/3/3	日	朝	1	新東亜学の前進
246	1940/3/4	月	朝	1	『遠きを含む』自覚
247	1940/3/5	火	朝	1	南京は昂奮する
248	1940/3/6	水	朝	1	平和女神の魂胆
249	1940/3/7	木	朝	1	東亜海面の欧州戦
250	1940/3/8	金	朝	1	戦（たたかひ）より愛生れん
251	1940/3/9	土	朝	1	梨園を荒す勿れ
252	1940/3/10	日	朝	1	陸軍記念日の発想
253	1940/3/11	月	朝	1	滅共運動の本質
254	1940/3/12	火	朝	1	物価に潜む敵性
255	1940/3/13	水	朝	1	よい日本人になれ
256	1940/3/14	木	朝	1	訝する宣言と声明
257	1940/3/15	金	朝	1	ソ芬和平の波紋
258	1940/3/16	土	朝	1	建設の春ひらく
259	1940/3/17	日	朝	1	食糧政策の樹立
260	1940/3/18	月	朝	1	特派大使の使命
261	1940/3/19	火	朝	1	興亜教育・窄き門
262	1940/3/20	水	朝	1	軍管理工場の移譲
263	1940/3/21	木	朝	1	中政会議の転生
264	1940/3/22	金	朝	1	分解を急ぐ政党
265	1940/3/23	土	朝	1	南京遷都の意義
266	1940/3/24	日	朝	1	“華北政務委員会”
267	1940/3/25	月	朝	1	ソ聯は手を出した
268	1940/3/26	火	朝	1	否認された重慶
269	1940/3/27	水	朝	1	戒心すべき視聴
270	1940/3/28	木	朝	1	処理か、建設か
271	1940/3/29	金	朝	1	臨時政府の軌跡
272	1940/3/30	土	朝	1	“中国好日”を待望す
273	1940/3/31	日	朝	1	花花ひらき耀（かゞよ）ふ
274	1940/4/1	月	朝	1	東亜情勢の転機
275	1940/4/2	火	朝	1	古きものの悲しみ

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

276	1940/4/3	水	朝	1	和平は便宜に非ず
277	1940/4/5	金	朝	1	清明節に感あり
278	1940/4/6	土	朝	1	日華を貫く道理
279	1940/4/7	日	朝	1	青天白日の態度
280	1940/4/8	月	朝	1	民衆層への突撃
281	1940/4/9	火	朝	1	汪兆銘氏の表情
282	1940/4/10	水	朝	1	経済戦の血祭・諾威
283	1940/4/11	木	朝	1	燃上がる同志愛
284	1940/4/12	金	朝	1	現地会議への期待
285	1940/4/13	土	朝	1	観光・慰問・視察
286	1940/4/14	日	朝	1	建設・生活新秩序
287	1940/4/15	月	朝	1	混沌より統一へ
288	1940/4/16	火	朝	1	重慶の憲政茶番劇
290	1940/4/18	木	朝	1	戦火の防波堤たれ
291	1940/4/19	金	朝	1	明朗な象徴的収穫
292	1940/4/20	土	朝	1	媚態を解剖せよ
293	1940/4/21	日	朝	1	毛沢東に与ふ
294	1940/4/22	月	朝	1	興亜教育の指向
295	1940/4/23	火	朝	1	ドナウの波高し
296	1940/4/24	水	朝	1	“現銀”妥結の影響
297	1940/4/25	木	朝	1	英霊をろがむ日
298	1940/4/26	金	朝	1	全権大使着任す
299	1940/4/27	土	朝	1	新東亜の謝肉祭
300	1940/4/28	日	朝	1	国旗への愛と誇
301	1940/4/29	月	朝	1	佳節を寿ぎ奉る
302	1940/4/30	火	朝	1	晋南にあがる凱歌
303	1940/5/1	水	朝	1	東亜聯盟への発足
304	1940/5/2	木	朝	1	“素足”は象徴する
305	1940/5/3	金	朝	1	聖地五台山の復活
306	1940/5/4	土	朝	1	大陸生活の設計
307	1940/5/5	日	朝	1	怪しからぬ移民法
308	1940/5/6	月	朝	1	大臣の前線慰問
309	1940/5/7	火	朝	1	中日協会に望む
310	1940/5/8	水	朝	1	法幣は転落する
311	1940/5/9	木	朝	1	欧洲戦争夏の陣
312	1940/5/10	金	朝	1	抗戦勢力の深傷
313	1940/5/11	土	朝	1	電撃戦と東亜圏—蘭印監視の要請急—
314	1940/5/12	日	朝	1	中国とイギリス
315	1940/5/13	月	朝	1	近東へ伸ばせ触手
316	1940/5/14	火	朝	1	さまよへる蘭印

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

317	1940/5/15	水	朝	1	イタリアの参戦
318	1940/5/16	木	朝	1	欧洲戦争の方向
319	1940/5/17	金	朝	1	青年に世紀は拓く
320	1940/5/18	土	朝	1	アメリカの気持
321	1940/5/19	日	朝	1	大陸に居る責任
322	1940/5/20	月	朝	1	日本商人諸君
323	1940/5/21	火	朝	1	どツちが大きいか
324	1940/5/22	水	朝	1	闇に蠢く日本人
325	1940/5/23	木	朝	1	打倒経済遊撃戦
326	1940/5/24	金	朝	1	帰還将兵の動向
327	1940/5/25	土	朝	1	没法子（メエ・フアー・ツ）と有弁法（ヨオ・バン・フアー）
328	1940/5/26	日	朝	1	芽を出せ新武器
329	1940/5/27	月	朝	1	黙々たる偉力
330	1940/5/28	火	朝	1	大陸児童の体位
331	1940/5/29	水	朝	1	日華習俗の距離
332	1940/5/30	木	朝	1	世界分割の序説
333	1940/5/31	金	朝	1	アメリカペちゃんこ
334	1940/6/1	土	朝	1	明暗・興亜奉公日
335	1940/6/2	日	朝	1	科学者の従軍行
336	1940/6/3	月	朝	1	悠々とやるべし
337	1940/6/4	火	朝	1	不介入の弾力性
338	1940/6/5	水	朝	1	“承認”への新段階
339	1940/6/6	木	朝	1	新党はバスである
340	1940/6/7	金	朝	1	王揖唐氏への期待
341	1940/6/8	土	朝	1	我等 朝に鍛へん
342	1940/6/9	日	朝	1	振り廻す錆び刀
343	1940/6/10	月	朝	1	時は金であるか
344	1940/6/11	火	朝	1	大御心に帰一す
345	1940/6/12	水	朝	1	鉄鎖断たるゝ日
346	1940/6/13	木	朝	1	軍律・自粛・道義
347	1940/6/14	金	朝	1	重慶降服の危機
348	1940/6/15	土	朝	1	新秩序は勧告す
349	1940/6/16	日	朝	1	パリ最後の日
350	1940/6/17	月	朝	1	日華を繞る条件
351	1940/6/18	火	朝	1	欧亜外交の火花
352	1940/6/19	水	朝	1	前線へとゞけ 銃後の祈誓
353	1940/6/20	木	朝	1	アメリカの混乱
354	1940/6/21	金	朝	1	天津問題の妥結
355	1940/6/22	土	朝	1	仏印の抗日性格
356	1940/6/23	日	朝	1	北京神社鎮座祭

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

357	1940/6/24	月	朝	1	戦ふ兵と耕す兵
358	1940/6/25	火	朝	1	新政治体制の曙
359	1940/6/26	水	朝	1	いよいよドーヴア
360	1940/6/27	木	朝	1	西と東の新秩序
361	1940/6/28	金	朝	1	大陸も発言せよ
362	1940/6/29	土	朝	1	東亜に種蒔くもの
363	1940/6/30	日	朝	1	建設外交新秩序
365	1940/7/2	火	朝	1	発願・千人葉書
366	1940/7/3	水	朝	1	政治の次代的性格
367	1940/7/4	木	朝	1	現地の結婚問題
368	1940/7/5	金	朝	1	バルカン発火す
369	1940/7/6	土	朝	1	重慶の空南京の空
370	1940/7/7	日	朝	1	事変第三周年を迎へ「銃声一発」の意義を想ふ
371	1940/7/8	月	朝	1	奥様着物をどうぞ
372	1940/7/9	火	朝	1	フランスの行方
373	1940/7/10	水	朝	1	近衛公の設計図
374	1940/7/11	木	朝	1	無名部隊を讃ふ
375	1940/7/12	金	朝	1	俺が島の新秩序
376	1940/7/13	土	朝	1	大陸の青年学生
377	1940/7/14	日	朝	1	八峰山頂の栄光
378	1940/7/15	月	朝	1	何処へ行く印度
379	1940/7/16	火	朝	1	“大陸に育つ”もの
380	1940/7/17	水	朝	1	新政治体制への扉
381	1940/7/18	木	朝	1	衆望趨ふところ
382	1940/7/19	金	朝	1	建国神廟を仰ぐ
383	1940/7/20	土	朝	1	援蔣禁絶・三面鏡
384	1940/7/21	日	朝	1	近衛さんに求む
385	1940/7/22	月	朝	1	自粛自戒・第一線
386	1940/7/23	火	朝	1	強力政治の発足
387	1940/7/24	水	朝	1	新欧羅巴の誕生
388	1940/7/25	木	朝	1	汎米工作の前途
389	1940/7/26	金	朝	1	中国人士に告ぐ
390	1940/7/27	土	朝	1	英本土攻撃近し
391	1940/7/28	日	朝	1	慰問袋を贈らう
392	1940/7/29	月	朝	1	重慶の外交路線
393	1940/7/30	火	朝	1	ルマニアの解体
394	1940/7/31	水	朝	1	思想国防の要請
395	1940/8/1	木	朝	1	生かせ興亜奉公日
396	1940/8/2	金	朝	1	皇国の前進指標
397	1940/8/3	土	朝	1	現地と政治体制

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

398	1940/8/4	日	朝	1	日ソ外交の基点
399	1940/8/5	月	朝	1	どツちの侮辱か
400	1940/8/6	火	朝	1	“海賊”にもの申す
401	1940/8/7	水	朝	1	国防科学の確立
402	1940/8/8	木	朝	1	奢侈と無駄の断層
403	1940/8/9	金	朝	1	文化工作か提携か
404	1940/8/10	土	朝	1	ソ聯・アメリカ・日本
405	1940/8/11	日	朝	1	英駐屯軍の撤退
406	1940/8/12	月	朝	1	皇道外交の針路
407	1940/8/13	火	朝	1	相俱に自粛せん
408	1940/8/14	水	朝	1	ひとつの新体制
409	1940/8/15	木	朝	1	言論陣の新体制
410	1940/8/16	金	朝	1	アメリカも倣へ
411	1940/8/17	土	朝	1	独英死闘の序曲
412	1940/8/18	日	朝	1	管見華北新体制
413	1940/8/19	月	朝	1	構想熟す新体制
414	1940/8/20	火	朝	1	新民華北の舵手
415	1940/8/21	水	朝	1	まごゝろ金字塔
416	1940/8/22	木	朝	1	吾等戦時に在り
417	1940/8/23	金	朝	1	現地に結ぶ“隣組”
418	1940/8/24	土	朝	1	大英帝国の挽歌
419	1940/8/25	日	朝	1	英米一蓮托生論
420	1940/8/26	月	朝	1	テロ団検挙の示唆
421	1940/8/27	火	朝	1	新政治体制の顔
422	1940/8/28	水	朝	1	建設外交の人事
423	1940/8/29	木	朝	1	大政翼賛の臣道
424	1940/8/30	金	朝	1	蘭印使節鹿島立
425	1940/8/31	土	朝	1	新体制の単一化
426	1940/9/1	日	朝	1	美点長所の探求
427	1940/9/2	月	朝	1	周仏海氏に求む
428	1940/9/3	火	朝	1	重慶とロンドン
429	1940/9/4	水	朝	1	防共華北の新局面
430	1940/9/5	木	朝	1	美はしき日本人
431	1940/9/6	金	朝	1	たふとき御戦死
432	1940/9/7	土	朝	1	輿論は見落とす
433	1940/9/8	日	朝	1	輪禍防止への道
434	1940/9/9	月	朝	1	華北情勢の検討
435	1940/9/10	火	朝	1	秋風に崩るゝもの
436	1940/9/11	水	朝	1	中国習俗の把握
437	1940/9/12	木	朝	1	華北経済新体制

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

438	1940/9/13	金	朝	1	青年層の把握へ
439	1940/9/14	土	朝	1	軍拡世界一の夢
440	1940/9/15	日	朝	1	をろがめ日の丸
441	1940/9/16	月	朝	1	建川大使の役割
442	1940/9/17	火	朝	1	新体制準備成る
443	1940/9/18	水	朝	1	大陸の土も哭け
444	1940/9/19	木	朝	1	闘ふ中国青年党
445	1940/9/20	金	朝	1	下意とは何ぞや
446	1940/9/21	土	朝	1	心身動員と青年
447	1940/9/22	日	朝	1	日本色は是非か
448	1940/9/23	月	朝	1	大東亜への理念
449	1940/9/24	火	朝	1	仏印進駐の意義
450	1940/9/25	水	朝	1	東亜とフランス
451	1940/9/26	木	朝	1	国土計画の基底
452	1940/9/27	金	朝	1	狂乱する新嘉坡
453	1940/9/28	土	朝	1	誓は固し日独伊
454	1940/9/29	日	朝	1	華北のよろこび
455	1940/9/30	月	朝	1	応へまつる“決意”
456	1940/10/1	火	朝	1	安全地帯を斬る
457	1940/10/2	水	朝	1	英国、恥の上塗り
458	1940/10/3	木	朝	1	生活革新の命題
459	1940/10/4	金	朝	1	仰げ尊き御精励
460	1940/10/5	土	朝	1	滇緬公路（ビルマ・ルート）の再開
461	1940/10/6	日	朝	1	洋車・ボーイ・阿媽
462	1940/10/7	月	朝	1	調査機構の一元化
463	1940/10/8	火	朝	1	皇軍感謝の態度
464	1940/10/9	水	朝	1	皇道外交の確立
465	1940/10/10	木	朝	1	新日本と新世界
466	1940/10/11	金	朝	1	大政翼賛と現地
467	1940/10/12	土	朝	1	二つのアメリカ
468	1940/10/13	日	朝	1	祈願と宣誓の晨
469	1940/10/14	月	朝	1	高度合作の基底
470	1940/10/15	火	朝	1	神に還る有難さ
471	1940/10/16	水	朝	1	現地“禁令”の限界
472	1940/10/17	木	朝	1	共産勢力の評価
473	1940/10/19	土	朝	1	三B政策再現か
474	1940/10/20	日	朝	1	石門地区の民芸
475	1940/10/21	月	朝	1	事変の国際的視角
476	1940/10/22	火	朝	1	旧秩序煙火大会
477	1940/10/23	水	朝	1	大東亜圏と華僑

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

478	1940/10/24	木	朝	1	上位下達の極意
479	1940/10/25	金	朝	1	タイの失地要求
480	1940/10/26	土	朝	1	前線に恥づる心
481	1940/10/27	日	朝	1	国民精神の昂揚
482	1940/10/28	月	朝	1	新文化共栄の道
483	1940/10/29	火	朝	1	独仏・独西両会談
484	1940/10/30	水	朝	1	炳として五十年
485	1940/10/31	木	朝	1	民草茲に光あり
486	1940/11/1	金	朝	1	自粛日本食管見
487	1940/11/2	土	朝	1	希臘の道・羅馬の道
488	1940/11/3	日	朝	1	清高の空に仰ぐ
489	1940/11/4	月	朝	1	聖戦翼賛の体制
490	1940/11/5	火	朝	1	焦燥（あせ）るな現地“翼賛”
491	1940/11/6	水	朝	1	詩と夢を与えよ
492	1940/11/7	木	朝	1	東亜経済圏の基調
493	1940/11/8	金	朝	1	興味なき見世物
494	1940/11/9	土	朝	1	ソ聯・中共・蔣政權
495	1940/11/10	日	朝	1	奉祝二千六百年
496	1940/11/11	月	朝	1	湯爾和博士を悼む
497	1940/11/12	火	朝	1	聖戦翼賛を誓ふ
498	1940/11/13	水	朝	1	ソ・独外相会談す
499	1940/11/14	木	朝	1	八峰山頂に祈る
500	1940/11/15	金	朝	1	「北京」を保存せよ
501	1940/11/16	土	朝	1	共匪最後の段階
502	1940/11/17	日	朝	1	東西新秩序の切点
503	1940/11/18	月	朝	1	凱歌は高し徳石線
504	1940/11/19	火	朝	1	タイを釣るもの
505	1940/11/20	水	朝	1	独ソ会談後日譚
506	1940/11/21	木	朝	1	欧亜聯合の脅威
507	1940/11/22	金	朝	1	同志国（ハンガリア）来り投ず
508	1940/11/23	土	朝	1	新体制の年の暮
509	1940/11/24	日	朝	1	大陸の女性建設
510	1940/11/25	月	朝	1	雲表に聳ゆる人 逝ける西園寺公
511	1940/11/26	火	朝	1	枢軸の躍進と中国
512	1940/11/27	水	朝	1	指導者への視角
513	1940/11/28	木	朝	1	戦果確保の責任
514	1940/11/29	金	朝	1	帝国議会の年輪
515	1940/11/30	土	朝	1	日華段階の飛躍
516	1940/12/1	日	朝	1	建設はこれからだ
517	1940/12/2	月	朝	1	狙撃・治安・決意

『東亜新報』の編集局・論説委員について〈論文〉

518	1940/12/3	火	朝	1	経済新体制の周辺
519	1940/12/4	水	朝	1	欧州戦争“冬の陣”
520	1940/12/5	木	朝	1	治安と邦人の責任
521	1940/12/6	金	朝	1	東亜経済の飛躍
522	1940/12/7	土	朝	1	タイに絡む策動
523	1940/12/8	日	朝	1	興利防患の目標
524	1940/12/9	月	朝	1	新民会全聯会議
525	1940/12/10	火	朝	1	外人記者の構想
526	1940/12/11	水	朝	1	一億人の思想戦
527	1940/12/12	木	朝	1	全聯と華北の使命
528	1940/12/13	金	朝	1	民族接触の外交
529	1940/12/14	土	朝	1	全聯会議の収獲
530	1940/12/15	日	朝	1	慰問袋と慰問行
531	1940/12/16	月	朝	1	苦悶する共産軍
532	1940/12/17	火	朝	1	汗の建設・血の凱歌
533	1940/12/18	水	朝	1	興亜迎春の規範
534	1940/12/19	木	朝	1	華北の文化的特質
535	1940/12/20	金	朝	1	通貨闘争の展開
536	1940/12/21	土	朝	1	松岡外交の布陣
537	1940/12/22	日	朝	1	文人督弁に望む
538	1940/12/23	月	朝	1	近衛内閣の物理
539	1940/12/24	火	朝	1	本多大使の出発
540	1940/12/25	水	朝	1	家族制度の周辺
541	1940/12/26	木	朝	1	翼賛議会の本質
542	1940/12/27	金	朝	1	文化華北の性格
543	1940/12/28	土	朝	1	挺身慰問の狙ひ
544	1940/12/29	日	朝	1	“鉄の新体制”確立
545	1940/12/30	月	朝	1	現地文化人の態度
546	1940/12/31	火	朝	1	旧秩序よあばよ